

【暗証聖句】創世記1章1節「初めに、神は天地を創造された」

【日・創造の神】

聖書は、「初めに、神は天地を創造された」（創世記1章1節）という言葉で始まります。この最初の短い言葉の中に、この世界には始まりがあったということ、この世界には神がおられるということ、そしてその神が初めにこの世界を創造されたのだという、驚くべき事実が書かれてあります。また、聖書の中で「神」と訳されている言葉には、エロヒームとヤハウエの2つの言葉が使い分けられており、前者は人間をはるかに超えた絶対的な存在であること、また後者はいつも人と共におられる存在であることを表しています。つまり、神様は人間が近寄りたがたい恐れ多い絶対的な存在でありながらも、同時にいつもそばにおられる優しい愛の存在でもあるということです。この2面性があることをしっかりとらえておくことが大切で、そのことによって不必要に神様を恐れたり、また逆に神様を軽く見ることを防いでくれます。

【月・創造の御業】

神様は7日間かけてこの世界を創造されました。1日ごとに様々なものを作り上げていく中で、「神は光を見て、良しとされた」（創世記1章4節）というように、創造の業の区切りごとに、「神は良しとされた」と書かれてあります。この「良しとされた」という言葉には、創られた目的の通り「きちんと機能している」という意味が込められているだけでなく、「非常に美しく完璧で、その中に何の悪もなかった」という意味も込められていました。いま私たちが見ている世界とは、様々な点で違っていたのでしょう。もちろん、いまも大自然を見渡せば神様の御手の業のすばらしさに触れることはできます。私たちが生きていくことができるように、太陽の光が降り注ぎ、植物は酸素を供給し、雨が地を潤します。しかし、最初に神様が創造された世界ではないのです。暑すぎたり寒すぎたり、雨が降りすぎて洪水が起きたり少なすぎて干ばつが起きたりと、神様が良しとされた世界に比べると、とても不完全な状態となってしまっています。そして、その中でも最大の違いはこの世界に死が入り込んだことです。

また、神様がこの世界を創造されたとき、初めから完璧な形で機能しました。進化論者たちが主張するように、少しずつ長い時間をかけながら機能するようになっていったものではありません。創造するという言葉「バーラー」は、神様を主語とするときにだけ使われる言葉で、単に何かを作ったというレベルではなく、これまでなかった全く新しいものの創造したということを意味しています。まさに神様は無から有を創り出されたのです。

【火・安息日】

天地創造は6日間ではなく、7日目の安息日をもって完成します。単純に創造の御業だけであれば6日間で終わっても良かったことでしょう。しかし、神様は一つの働きを終えられた後に静かに休む時間を設けられることで、すべての創造の御業を終えられたのです。そして、この第七日目を聖別し祝福されました。この世界が、人が幸せに生きていくことができるように考えて創造されたように、安息日も私たちの祝福と幸せのために設けてくださったのです。働きづくめではなく、1日ゆっくり休めるように、また神様の創造の業に目を向けることで私たちが神様によって創造された被造物であることを思い返し感謝するために、そして、神様と交わり救われている喜びと真の幸福を得るために。安息日を聖別し、深い主との安息に入ることで、新たな1週間の力が与えられます。このリズムがとても大切なのです。私たちはいま、天地万物の再創造に向かっていることを知っています。神様を信じる者は、日ごとに新たにされ、やがて全く新しく作り変えられるときがきます。最初の世界の創造が安息日をもって完成したように、この再創造の完成も安息日が重要な役割を担っているとは言えないでしょうか。安息日ごとに、新たな再創造の完成を目指して生きていることを確認することができるのです。

【水・人の創造】

創造の御業の最後に、人間が創造されました。これは人間が生きていくために必要なものを、先に神様が準備してくださったとも言えます。ところで、創世記1章26節で、「神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう」と書かれてあります。他のどの被造物に対しても、このように神に似せて創造されたと言われたことはありませんでした。人間の創造は他のものの創造と明らかに異なっていたことがわかります。また、「我々にかたどり、我々に似せて」と同じような言葉が繰り返されていますが、原語のヘブライ語では、「ツエム」と「デムート」という2つの異なる言葉が使われていて、その意味は、ツエムは姿形が似ているという意味なのですが、デムートは霊的なものや品性など内面が似ているという意味があります。人間の親子も顔が似ているだけでなく、正確も似ていることがよくあるものです。同じように罪を犯す前の人間は、姿かたちだけでなく内面も神様に似せて創造されたのです。エレン・G・ホワイトは「アダムが創造主の御手によってつくられたとき、彼の肉体と知能、霊性は神のみ形を備えていた」（教育 P4）と語っています。またこのことは、人間が創造された過程を見てもわかります。神様は土で人を形作り、次にご自分の息を吹き込まれて、人は生きるものとなりました。息は霊と訳される言葉です。つまり、神様はまず土でご自分の形に似せて人を形作り、次にご自分の霊を吹き込むことで内面も神様に似せられたのです。

【木・人間の責務】

神様は人間を「エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされました」（創世記2章15節）。人間が生きていくために必要な食べ物はすべて揃っており、自由に食べることができました。そのことを考えると、人間に与えられた「耕す」という働きは、人間が生きるために必要な働きではないことがわかります。この「耕す」という言葉は奉仕すると言う意味があります。神様は生きていくために畑仕事をせよと言われたのではなく、神様が創造された自然の中で、神様に奉仕する喜びを与えられたのです。しかし、人間が罪を犯したとき、土が呪われ、耕すと言う奉仕は苦勞の多いものとなってしまいました。しかし、神様は「耕す」という奉仕の業を残されました。それは罰なのでしょう。いいえ、呪われた土を耕すことは大変な労働となったのは事実ですが、神様が同じ奉仕の業を与えられることで、見捨ててはおられないということを示されたのです。

神様はアダムが一人寂しくしているのをご覧になり、アダムのあばら骨から女を作られます。アダムの一部から女が作られたということは、男と女は一体であり、平等であることを示しています。また一体とは、肉体的な一体というだけでなく、霊的に一つとなるということも意味しており、花婿であるイエス様と花嫁である私たちが霊的に一つとなることの大切さを教えています。